学力づくりの最前線！

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

学力研の広場

ホームページアドレス http://gakuryoku.info/

NO. ３４３

2023. 10. 7

学 力 研 発行

学力研常任委員長
岸本　ひとみ
Mail: info21@gakuryoku.info

まとまりのあるクラスをつくるためには、教師だけの力でクラスをまとめようという発想を捨てることから始めなくてはいけないと気付かされました。

教師がやるべきことはクラスをまとめようとすることではなく、子どもたちが協力して課題を解決すべき場を設定することだったのです。子どもたちが、力を合わせることは素敵なことだと実感し、自ら力を合わせたと思えるようにするシステムをつくることだったのです。

（中略）「クラス会議」を行うことで、子どもたちは「クラスは自分たちでつくっていくものなんだ」と自然に認識していきます。そして、実際に、自分たちの問題を自分たちで解決し、自分たちでクラスをつくっていくようになります。

赤坂 真二『いま「クラス会議」がすごい!』（2014.10 学陽書房）

自ら考えて行動できる子どもに育てるにはどうすればいいのでしょうか。子どもたちを自治的な集団に育てるためにできる取り組みをたくさん紹介しています。読者の皆様のご参考になれば幸いです。（李）

CONTENTS

◇特集「子どもが育つ自治的な取り組み」◇

子どもが育つ自治的な取り組み　吉田雅直・・・・・・２
子どもが育つ自治的な取り組み（高学年）　根無信行・・・・・・４
リスタートで子どもを動かす　加藤英介・・・・・・６
「すべてのものは二度つくられる　丸小野聡暢・・・・・８
「自治の萌芽」としての清掃指導　堀井克也・・・・・１０

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載 60「意欲格差」に負けない！公立小学校へ　岡本美穂・・・・・１２
考える力をつけるための授業の組み立て方②　思考力の土台となるものとは？荒井賢一・・・・・１４
社会科（歴史）授業力アップ講座　⑨　素材研究　深澤英雄・・・・・１７

「第 17 期　先生のための学校・オンライン・１回目」報告　荒井賢一・・・・・１９
局長・常任委員長だより　・・・・・・・・・・２１
学力研カレンダー　・・・・・・・・・・２２

※久保先生の連載は、都合により休載させていただきます。

子どもが育つ自治的な取り組み

大阪　吉田雅直

学級づくりに「自治」の視点を取り入れようとしてから、もう二、三年が経とうとしていますが、実際に取り組んでみると、うまくいかないことの連続で、まだまだ報告できるような実践ができていないなぁというのが正直な感想です。

しかし、失敗だらけの実践を通して、学級づくりにおいて「自治」を目指すことの意味と大切さについては、少しずつ見えてきたような気がします。

今回は、この二、三年の間に、私が「自治」について考え、実践し、失敗しながら学んできたことについて述べてみたいと思います。

学力研に出会うまでの私が持っていた学級づくりのイメージは、休み時間には子どもたちと全力で遊び、クラス遊びにもどんどん取り組んで、「楽しいこと」で子どもたちとつながったり、子どもたちをつなげたりして、信頼関係を築き、その信頼関係に依拠する形で授業を成立させる、というものでした。これは低学年では比較的うまくいっていた（ような気がしていた）のですが、学習規律や学力保障という視点に欠けており、しっとりとした落ち着きのある、子どもたちがきらきら輝くクラスとはほど遠いものでした。実際、高学年ではうまくいかず、子どもたちもばらばらで、がさがさした、さわがしいクラスにしてしまっていました。いま思うと、遊びやイベントで作り上げた信頼関係はその中でしか通用しないのに、それを授業に持ち込もうという安易な発想が甘すぎたと反省しています。

学力研に出会い、「学力づくりで学級づくり」という視点を得たことで、私の授業も子どもたちも劇的な変化を遂げます。すべての子どもたちを同じようにきたえ、学力を保障する取り組みこそが、子どもたちをきらきらと輝かせ、学級づくりにつながるということを数々の追実践を通して確信した私は、学力づくりに力を注ぐことこそがよりよい学級づくりへの最善の道と信じて疑いませんでした。

そして、久しぶりに高学年を担任した時も、その信念に従い、学力づくりに力を入れ、それをもとに学級づくりを進めていきました。

はじめは、子どもたちからも保護者からも信頼を得ることができ、学級づくりもうまくいっているように思っていたのですが、少しずつ「あれ？」と思うようなことが増えてきました。はじめは小さなトラブルや違和感だったのですが、少しずつ気になるようになり、「このままではまずいな」と思うようになりました。いろいろ考えた結果その違和感の正体は「自治」の感覚の欠如なのではないかと思い至りました。

私は、問題や対立のない、平和な学級を目指すあまり、想定されるトラブルの種を予め排除してしまっていたのです。それが子どもたちから考える力を奪い、「自分たちの問題はみんなで話し合い、自分たちで解

決する」という「自治」の感覚を育てるチャンスを奪っていたのです。

そこで、子どもたちの自治力を育てるため、「クラス会議」に取り組むことにしました。はじめは議題が集まらなかったり、意見が出なかったり、すぐに多数決で決めようとしたり、意見の対立が感情の対立になってしまったり、うまくいかないことの連続でしたが、回を重ねるごとに、クラス会議の意味や「よさ」が子どもたちの間に少しずつ浸透していくのを感じました。

はじめは「みんなで話し合って決めたドッジボール大会が楽しかった」「またやりたい」というような感想が多かったですが、徐々に「クラスの問題は、みんなで話し合い、ルールを決めて、守ることで、みんなの力で解決することができる」ことへの気づきへと発展していきました。

「クラス会議」への取り組みを始めてからまだ二年目で、いつも失敗ばかりですが、いくつか気がついたことがあります。

まず、「導入」を丁寧に行うことの大切さです。クラス会議はクラスのみんなが幸せになるためにあるのであり、決して相手を「論破」したり、多数決で少数派意見を排除したりするためにあるのではないということや、クラス会議で決まったことは一週間みんなでやってみて、その結果を受けてまた話し合えばいいということ、人の意見は否定したり、ばかにしたりしないで最後まで聞くということなど、クラス会議の目的や意味、話し合いの基本的なルールなどをはじめにしっかりと確認します。

これがないと、クラス会議が子どもたちにとって互いに傷つけ合うだけの苦痛な時間になってしまったり、発言力や影響力の強い一部の子どもたちの意見だけがまかり通る非民主的な場になってしまいます。

また、いきなり子どもたちに司会・進行や書記をすべて任せるのではなく、はじめは教師がお手本としてクラス会議の進め方や意見の引き出し方、まとめ方などを示し少しずつ子どもたちに任せていくということも大切です。そして、もっと大切なのがいったん任せた以上、よほどのことがない限り、子どもたちの力を信じて見守るということです。発言ルールの無視や暴言などには指導が必要ですが、なかなか意見がまとまらなかったり、話し合いの方向性を見失っていても、ぐっとがまんします。大切なのは「いい解決策を出す」という「結果」ではなく、「みんなで話し合って決めた」という「過程」なのです。

たとえ教師のアドバイスで意見がまとまり、みんなが納得する「いい解決策」が出せたとしても、それは「先生が教えてくれた答え」であり、それでは子どもたちの自治の力は育たないのです。これに対し、ちょっと問題がありそうな解決策であっても、子どもたちが民主的な話し合いによって導き出した解決策であれば、みんな一生懸命守ろうとするし、一週間後に結果をふり返り、修正することもできます。そして、この「先生の力を借りずに、みんなで話し合って問題を解決できた」という感覚が子どもたちの「自治力」を育てるのです。自治を目指す取り組みは、教師自身が「子どもたちが教師の指示に素直に従い、何事もなく平和に過ごせればいい」と考えるのか、「教師がいなくても自分たちで考えて行動できる学級集団を目指したい」と考えるのかが問われているのではないでしょうか。

子どもが育つ自治的な取り組み（高学年）

大阪　根無　信行

一、教室における自治の大切さと活動時間の確保

子どもたちが自分やクラスの現状を知り、こういうクラス（や自分）にしたいという目標を持ち、それに向かってできることを考え、行う、という過程に、子どもが成長する場面があると思っています。それを子どもが行えるようになることが、自治の形なのだと思います。しかしながら、授業中に定期的に自治的活動を行うための学級取り扱い（いわゆる学級活動）は、特別活動の時間に設定することが多い中、本校の教育課程において、毎週火曜日の６時間目の一時間が特別活動の時として時間割に設定されてはいますが、月に４時間として、そのうち一時間は「縦割り活動」として全校で使うものとなっています。そこで高学年は、縦割り活動を行うため、計画や進行を中心になって担うことが自治的活動の一つと考えて取り組まれています。ただ、年間を通して、様々なアンケート（いじめアンケート・外国語アンケート・学校教育アンケート等）や・プログラミング授業数時間・障害理解教育・国際理解教育・防犯教室・交通安全教室等、またそれらのふりかえりシートの依頼があり、記入時間などに当てるために、「学級」としてまとまった一時間を継続して取り扱うことはできていません。ですので、縦割りの準備の時間が、子どもたちが自分たちの指導で低学年を楽しませる計画につながると捉えると、自治の力を引き出すことになるかもしれません。

二、縦割り活動

本校は各学年２クラス規模、全校児童数４００人程です。それぞれのクラスを８班ずつに分け、１から６年までを１つの班とした２５人程度の班を１６班作ります。それぞれに班長（６年生から選出）と副班長（５年生から選出）がおり、月に一度、室内や屋外遊び、工作などを計画してから活動します。計画に使われる時間は、５・６年生のみ参加する委員会活動の時間（授業時数外）です。遊びに使う用具や、司会、工作の説明原稿は、班長を中心にそれぞれの班で別々の物を作成し、チェックや練習は、休憩時間や放課後に班担当の教員と行っています。

活動当日は、あいさつ、出欠確認、司会進行まで、班長と副班長が行います。１年生と６年生、２年生と４年生、３年生と５年生はペア学年となっていて、作業の手伝いや補助を行います。担当の教員は、当日は基本的には「見守る」という立場に徹します。班長は班長ノートに「今回の活動の目当て」も示して活動にのぞんでいて、活動後に担当教員と短い反省会を持ちます。班長ノートは名簿や司会原稿の他に、教員との交換ノートにもなっていて、アドバイスや改善点を書いてやりとりしています。

傘袋ロケット飛ばしの様子

三、縦割りゲーム大会

十一月には、２時限かけて校内のゲームコーナーを回る、縁日型の縦割り活動があります。班ごとにクリアした点数を競いあうゲーム大会です。小豆つかみやストラックアウト、１円玉落としや人文字づくりなど、学校中に設営されたコーナーをグループで回ります。６年生はそれぞれのコーナーの設営と店（？）番、ゲーム説明や誘導を担当します。５年生は１年～５年の小グループを引率する係にあたります。この行事は３０年以上前から本校で行われており、以前は焼き芋の窯を班ごとにブロックで運動場につくり、焼き芋を窯に投入してから、芋が焼けるまでゲームをして回り、（教員は主に火の番）、結果発表の時に焼けた芋を食べるという、もっと規模の大きなものでしたが、形を変えて今も残っています。ゲームを計画するにあたり、１年生から５年生までどの学年も楽しめるレベルのものにする必要がありますし、２時間以内にどのグループも参加できるよう、うまく回さないといけません。事前準備や、担当どうしの打ち合わせも大事になり、そのために、５年生までに見てきた経験を思い出して、活動に生かす力が必要だと言えます。

地域の地元の自治会が主催で、「〇〇っ子まつり」という企画を行っていることもよくあると思いますが、子どもたちによる自治的な活動といえるのかもしれません。

四、掃除と自治

掃除をすることが自治とは直接の関係はないかもしれませんが、掃除を進んでする子に、悪い子はいない、という思いでいます。私のクラスでは、そうじの担当は、一学期間、同じメンバーで同じ所を担当させています。合い言葉は、「掃除担当場所のプロになろう」です。高学年になれば、掃除担当場所が、学校中に広がり、十五分間の掃除時間に担任だけで全て声かけして回れないほどです。そこで、子どもたちが担当場所に責任を持って、次に使いやすいように考えながら掃除をしていく力が育って欲しいと思いました。同じ掃除場所を長く担当することで、当初担当が決まった頃、１５分かけていた掃除の手際が、決して手を抜いているわけではないですがだんだんと良くなり、１０分程度で終わるようになります。しかし、残りの５分を遊ぶのではなく、担当場所の中で他にできることを自分たちで探して、もっときれいにすることを目指すことにすると、時間中にできる掃除が増えていきます。一学期間、同じメンバーで、相談もしながら徐々にできるようになり、終了チャイムまで自主的に頑張っています。今年１学期に女子トイレ掃除になった３人は、人気のないと思われたトイレ掃除に２学期も立候補してくれました。また、６年生は１年生の掃除の応援に行くことも学校で割り振られており、これは全員経験してほしいと思ったので、２週間交代で、担当場所を抜けて行くことにしました。すると、本来の担当場所が手薄になるのですが、残りのメンバーでカバーし合ったり、教室担当を終らせてから、「応援に行きましょうか」と自ら言ってきてくれるたりする子が出てきました。

おわりに

先生がいないときにこそ、子どもたちの自治の力が試されると言います。自治的な活動も、誰のためになぜその活動をするのか、自身で理由を言語化できるくらいの思いを持って、活動できる力を育てることができたらと思います。

リスタートで子どもを動かす

加藤　英介

自治的な取組とは？

自治とは、自分たちで問題や課題を見つけ、話し合いをしたり解決をしたりと教師の介入を最小限して子どもの活動を最大限に発揮する状態を意味する。

現在、６年生４０人を担任している。四月当初は、無秩序の状態だった。とても授業ができる状態ではなかった。そのため、ルールを守ること、指示を聞いて行動できることを意識して指導を続けた。そのおかげで、授業では、ある程度私語もなく立ち歩きもなく終えることができてくるようになった。２学期になっても同じように当たり前のことが当たり前にできる雰囲気ができている。しかしながら、発表する子は一部の優秀な子のみに限定され、他の子は「言いたくない」「やりたくない」「誰かが言ってくれる」という他力本願な空気が教室全体に流れている。この原因は、子どもたちが昨年度までに教えてもらったことが大きく影響している。

例えば、お休みの子がいたとしよう。その子の係は配達係である。配るものはたくさんあるにも関わらず誰もやらなかった。見て見ぬふりをしていたのだ。子どもに「〇〇さん、配達してくれませんか。」と聞けば「ぼくの仕事ではないからやりません」という。こんな経験は初めてだった。よくよく話を聞くと、昨年は一人一役で係や当番を決めていたようだ。決められたことだけをやればいい、自分以外のことは関係ないという自己中心的な考え方が根付いていた。ある意味ロボットのような指示待ち人間が多くいた。

学校は工場ではない。言われたことをただ黙々とやる場所でもない。自分の可能性を広げ、仲間と協力しながら学びを実現していく場所である。とはいいつつも何年もかけて出来上がったものを壊して作り変えるのは至難の業である。低・中学年であれば、まだ柔軟に対応できるかもしれないが、５年間積み上げたものは急には変えられない。だからこそ、ゆっくり子どもたちに合わせて進めていく必要がある。そこで意識することは

① 目標を決める
② 実行する
③ 評価する
④ 修正して実行する

ということだ。クラスとしても個人としても今よりもよくしたいという思いは少なからず子どもたちの中にはあった。だから、個人目標をまとめてクラス目標にしたり、クラスの目標から個人の目標を決めたりと「できた」という実感がわくようにした。

リスタート

取り組んだことは、学級委員が教師の代わりに今日のよかったことや問題だと思っていることを話してもらうことだ。クラスがよりよくなるための目標を伝え、目標が達成できているかどうか朝や帰り

の会で話す機会を設けた。出てきた目標は「チャイム着席・掃除は黙って取り組む・給食準備は１０分」などである。取り組んだ後は必ずできたかどうかを評価する。３５人以上できれば◎としていた。全員と言いたいところだが、「できた」という自信につなげるために、初めのうちはゆるくしておいた方がよい。雰囲気がよくなる場合が多いからである。仮に全員ができたときがあったとするならば、花丸でさらに雰囲気がよくなる。

そのときに大切なことは、教師の小さな介入である。子どもが変化した瞬間、ささやかな行動、周りは気付いていないが、誰かのためにしていた取組などをさりげなく伝えていく。具体的に次のように声を掛けていく。

Ａさんはただ座るだけでなく次の時間の教科も準備していましたね。

Ｂさんは担当以外のところも掃除していましたね。自分で気付ける力がすてきですね。

Ｃさんはチャイムと同時にすぐに配膳台準備をしましたね。当番の動きを見て、できることを探せる行動力があったからこそ達成できたと思います。ありがとう。

このようなことを続けながら、学級会で話したり、昼ごはんを食べ終わった後の隙間時間で取組状況を確認したりして「できた」を実感させている。

指示待ちだった子達は、自分にできることを探しながら係の仕事に取り組むようになった。授業中、何も発言しなかった子は目標を達成するために、進んで発表をしようと努力するようになった。立ち歩いていた子は座って受けるようになりノートを書くようになった。

子どもたちの力を伸ばしていくには地道な言葉がけと粘り強さが教師に求められる。もちろん、全体でピシッと厳しく指導をすればその場は終わるかもしれないが、いつか反発が起こる。また指導する。この繰り返しではいつまでたっても教師がいなければ治めることができない。自治を目指すなら、その子の心が上向きになるように声をかけ、ときには見守り変わりたいという思いになるまで待ち続けることが何よりも大切である。

目標を決めたら、実行する。そして評価をしながら修正し次の目標を決める。このサイクルは子どもだけでなく教師自身にもあてはまる。学びとは、常に疑問をもち答えを探すという繰り返しである。一回ではなく二回、三回とすぐにリスタートをすることで、子どもの変容を見ることができる。僕自身もそうだが、ついついできていないことばかりに目がいきがちである。しかし、そこだけを見て指導をしてしまうと信頼関係は一気に崩れてしまう。だからこそ、その中でもできていることに目を向け、その子の成長の過程を伝えることが必要である。言葉では簡単だが、実際にやるとなるとかなりの我慢を強いられる。

自分自身の戒めも込めてだが、二学期は、教師の介入を最小限にして子どもの活動を最大限に発揮する自治を目指したクラスにしていくために、学級会、行事、児童会活動などにも目を向けて子どもたちの活躍の場を広げていきたいと思う。

すべてのものは二度つくられる

丸小野　聡暢

ゴールのイメージができているか

まず、大切なことは先生方が自治的な学級集団の姿をイメージすることができているかということです。子供たちの自治的な姿をイメージできていなければ、どのような取組をしても子供は育ちません。しかし、自治的な学級集団の姿がはっきりとイメージできていれば、そのための取組はより具体化されていきます。ただ、クラスによって実態が異なります。このことは、現場で働かれる先生方は周知のことだと思います。私の学校では、学年で交換授業をしていますが、同じ教材で同じ発問をしても同じ授業にはなりません。それは、各学級で子供たちの実態が違うために、反応が違うからです。クラスによって実態が異なるなら、同じ方法で教育を行っても、効果も異なるということを前提に、実践を取り入れていく必要があります。

学級経営は教師のリーダーシップ

私の自治的な学級集団のイメージは、自分たちの問題を自分たちで折り合いを付けながら解決していく姿です。ゴールの姿は、先生方の学級経営観と直結しています。それは、先生方の教育観が学級経営に反映されているからです。授業で言えば、特別活動が学級経営の中核に位置付けられています。そのため、自治的な取組として、よく係活動（会社活動）が取り上げられます。私は、係活動の重要性は理解していますが、子供たちの自主的な活動というより、教師が押し付けている活動に見えるため、あまり取り入れていません。高学年を担任することが多いことも理由の一つかも知れませんが、今年度は行っています。それは、昨年度までの学級で子供たちが取り組み、今年も「やりたい」という意見が出たからです。係活動は、クラスを豊かにするために行うものです。高学年になれば、委員会活動や縦割り班活動など全校のために活動することが多くなるため、係活動の意義をクラスから全校に広げていく必要があると考えているからです。何をするのかではなく、何のために活動を行うかが大切です。そうでなければ、いつまでも自分のクラスだけが豊かになれば良いという考えから、教師も子供たちも抜けきらずに係活動の取組だけを充実する可能性があるからです。ただ、子供たちがやりたいと思うことは、やらせてあげる自由度も私は大切だと思っています。昨年度まで、一生懸命取り組んでいた係活動を担任の一言で取り止めてしまえば、子供たちの自主性や主体性を否定してしまい、良好な関係が築けないと考えているからです。「学級経営は〇〇だ」と明確な定義は示されていませんが、学級経営が教師と子供がいて成り立つものならば、お互いの関係性が重要になってきます。また、「よい授業をしようと思えば、よい授業をする子を育てなければならない」と久保先生も著書で述べているように、授業においても教師と子供の関係性が重要です。学級経営と

授業を切り離して二項対立のように考えられることもありますが、私は二つの関係は車の両輪のような関係だと思っています。学力研でも、「学力づくりで学級づくり」と言われるように、授業と学級経営は密接しています。ならば、特別活動は学級経営の中核かも知れませんが、その授業だけで完結するものではありません。特別活動で、お互い協力したり、主体性をもって活動したりしているのに、普段の授業や学校生活は教師が主導しているでは、矛盾が起こります。そうならないためにも、普段の授業から特別活動の要素を取り入れていく必要があります。

自治力・主体性は教師が引き出すものだ

私は子供たちの自治力や主体性は教師が引き出すものだと考えています。自治的な集団を育てるために必要なことは、クラスのルールづくりです。クラスに明確なルールがあれば、時間を守る、人の話を頷きながら聞くなどクラスとして共通の行動様式が定着してきます。共通の行動様式が定着してくれれば、クラスに「安心感」が生まれてきます。クラスの雰囲気に安心感が広まれば、主体性を引き出すことができます。私が目指す自治的な学級集団は、先ほども述べたように、自分たちの問題を自分たちで折り合いを付けながら解決していく姿です。そのために、私はどの授業でも「頼りになるのはお隣さん」と声を掛け、ペア学習を取り入れています。このペア活動に教師がどのような意図を持っているのかということが重要です。ペア活動をただの活動として取り入れれば、学習の型しか身に付けませんが、協働の場として取り入れれば、友達と協力して問題を解決してく生き方を身に付けることができます。写る姿は同じでも、活動の目的が違えば育つ姿が違います。日々の小さい取組ですが、毎日の地道な営みが子供たちを自治的な集団に育てていくのです。私のクラスでも、まだまだ集団としての姿は達成していませんが、何か困ったことがあれば、教師が叱責するのではなく、子供たちに考えさせ解決を委ねます。夏休み明けに、タブレットの使い方がルーズになっていて、9月の中旬に何人かの子供たちから「あの子の使い方が…」と相談がありました。学校としてのタブレットのルールがあるので、教師が叱責して終わることもできますが、敢えて学級会の議題で取り上げました。すると、子供たちが、自分たちの行動を振り返りながら、なぜそのようなルールがあるのか考え始めました。自分たちで話し合うことで、友達がどのように思っているかということも受け止め、その後の行動が変わっていきました。全員ではありませんが、子供たち同士で話したことで自制心をもって行動する姿が増えてきました。ただ、気を付けなければいけないことは、クラスの雰囲気によっては、このような話し合いをするとタブレット警察が現れ、キツイ注意をして友達同士の関係がよりギスギスしていく場合があります。その場合は、教師が注意することの方が良い時もあります。

「全てのものは二度つくられる」と言われます。それは、ものをつくる前に頭の中でイメージをして形にするという意味です。教育でも闇雲に実践を取り入れるのではなく、一度立ち止まって考えてみる必要があるのではないでしょうか。

「自治の萌芽」としての清掃指導

春日井学力研　堀井　克也

「掃除」と「自治」のつながり

大阪の岡本先生や吉田先生が以前講座で紹介されていた「自問清掃」に、私も一昨年から取り組んでいます。きっかけは、平成三十年の冬のフォーラムでの宇野弘江先生の講演でした。その中で、自問清掃について著書を出されている平田治先生が紹介されており、興味をもったのです。大まかに説明すると、掃除を「成長するための時間」ととらえ、「がまん玉」「親切玉」「見つけ玉」の三つの玉を磨くことを意識して取り組むのが自問清掃です。（自問清掃の詳細について気になった方は、ネットの情報や平田先生のご著書をご参照ください）

元々私は旧態依然とした清掃指導に大きな課題意識をもっており、当番表を無くして自分でその日の掃除で何をするのかをその場で決めさせるという方法を採用していました。**教師が全て決めてしまうから、指示されないと何もしない子どもを育ててしまうのだ**と考えていました。

自問清掃を実践するようになり、何をするかだけでなく、どこを掃除するかも子どもが決めるようになりました（あくまで学級に割り振られた担当場所の中で…ですが）。はじめの頃こそ、物珍しくて図書室の掃除をしたがる子や、仲の良い友達とくっついていつも一緒にいる子がいました。しかし、一学期を通して、多くの子どもが、何らかの意味をもってその日どこを掃除するかを選択するようになりました。例えば、**「暑いけれど土間の掃除をすることで、がまん玉をみがこう」**とか、**「教室を掃除している人数が少ないから、助けに行って親切玉を磨こう」**とか、**「昨日教室でいすの足が意外と汚れていることに気付いたから、見つけ玉を磨くために図書室のいすもきれいにしよう」**といったように、です。

教師の仕掛けで動き出す子どもたち

二学期が始まって早々、思いがけない出来事がありました。同学年の隣のクラスが、学級閉鎖になってしまったのです。

私は、胸に秘めていた策があったのですが、それを前倒しで実行するチャンスではないかと考えました。そこで、「隣のクラス、今週いっぱい学級閉鎖になってしまいましたね。何かしてあげられること、ないかなあ…」と子どもたちに問いかけました。子どもたちは「**え～…**」と少し戸惑いながらも一生懸命考えていました。そしてある子が「**そうだ、先生、お隣の分まで掃除してあげたらどうですか？担当場所、教えてほしいです。**」と言い出すと「**あ、それいいね。**」「**でも、うちの掃除場所はどうなるの？**」「**少ない人数で何とかやれるんじゃない？**」「**そうだね～。**」と盛り上がりました。そこで、あらかじめ聞いておいた掃除場所を伝えて、みんなが使う場所だけでも私たちで行うことにしました。もちろん事前に担任の先生や清掃担当の先生の許可も取ってあります。

隣のクラスの掃除場所を掃除する子達は、なんだか少し誇らしげです。一方、いつも

の場所を掃除している子どもたちも、いつもより人数が少ないので必死です。その日の成長ノート（一日の終わりに、その日の成長についてふり返りながら書いているもの）には、掃除についての記述があふれていました。学級閉鎖が明ける直前には、「**何日かぶりに学校に来て、教室が汚れていたらかわいそうだから教室もきれいにしてあげたい**」という子がいたので、教師の見守りの下で教室内も掃除してもらいました。

この出来事を通して、子どもたちの「自分で考え、決定し、実行する」という意識は一段と高まったように感じました。

成功体験が次の一歩へのエネルギーに

そして迎えた九月末。六年生が修学旅行へと出掛ける週が迫ってきました。五年生担任となった時から、ここは勝負のタイミングだと考えていたのでした。

「来週、六年生が修学旅行へ行って、次の日は家庭学習だから三日間学校にいません。…この後先生は、何て言うと思う？」と尋ねると、勘のいい子が「**あ、一時的に私たちが最高学年になるんだ！**」と気付きました。「**そうか、僕は臨時で班長をするのか。**」「**委員会の仕事も、六年生の分もやらないといけないね。**」と話が広がります。さらにしばらく様子を見ます。すると、「**そうだ、掃除はどうしたらいいんだろう。先生、六年生の掃除場所を教えて下さい。全部は無理だろうけど、やれる範囲でやりたいです。**」と言い出す子がいたのです。「**お隣の分の掃除をした時みたいに、みんなで協力して頑張ろうよ。**」「**いいねいいね。**」と盛り上がり始めました。子どもたちの思いを受け取って、同学年担当の先生と六年生の担任の先生方、清掃担当の先生と相談をしました。学校として五年生に請け負ってもらいたいのはトイレだけだったので、トイレを任せてもらい、後の場所もできる範囲でやってもらってよいということになりました。

この三日間は本当に様々な姿が見られました。まだ残暑の厳しい中庭の草むしりを（大の虫嫌いにも関わらず）虫を我慢しながら頑張った子や、三日間トイレ掃除を続けてその大変さや大切さに気付いた子、教室をごく少人数で掃除して「**集中すれば少ない人数でもこんなにできるのか**」と発見した子など、またしても成長ノートは掃除に関する内容でいっぱいになりました。私が思い描いていた以上の大きな成長を、掃除を通して成し遂げたようでした。

「自治の萌芽」を育てるためには…

今回は「自問清掃」を通してお伝えしましたが、みなさん「自問清掃」をやりましょう！ということを言いたいのではありません。私は、「自治の萌芽」を育てるためには、教師の側に**願い**と**見通し**と**手立て**がなくてはならないのではないか、と考えているのです。私の場合はたまたま清掃指導に対して関心が強かったために、このような実践を行い、結果として子どもたちは以前より少し自治的な集団に近付くことができたということなのだと考えます。ですから、これが例えば係活動などであっても、やはり願いと見通しと手立てがなければ、「自治の萌芽」は育たないと思います。

そして、子どもに期待をして待ち、素敵な姿に出会えたら思いっきり感動するとよいと思います。私はここに述べた数日間、本当に感動しっぱなしで幸せでした。芽生えた自治の芽が本物になるところまで、子どもと一緒にがんばっていきたいです。

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載　６０

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長　岡本　美穂

■校内研修会「クラス会議について」

８月３１日に校内研修会を行いました。

赤坂真二先生のメールより

クラス会議は，子どもと人生を共にする時間・・・なんとなくつぶやいた実感ですが，校長先生に取りあげていただき，新たに意味づけできました。私にとっても楽しい時間でした。研究のコンセプトがとってもシンプルでよいと思いました。子どもたちと先生方が益々よい時間が創造できるように応援しています。

■先生方の振り返りより

「とにかくやってみよう」

今回研修を受けて、クラス会議の回数をもっと増やしていこうと思いました。今は子どもたちから出た問題があるごとにしかやっていなかったが、赤坂先生の実践写真を見るとどの子も表情よく、楽しみながらやっているんだろうなと印象を受けました。やればやるだけ子どもたちのつながりも深まるし、クラスの雰囲気もよくなるんだろうなと感じました。とにかくやってみます！

「教師の信念」

前回の赤坂先生の研修でまずはやってみようと決意し、今回の研修でクラス会議を通してクラスの子どもとつながる、子ども同士をもっとつなげてたいという信念を持つことができた本当にすばらしい時間でした。前回と今回で点と点が線でつながった感じがしたのと具体的なイメージを持つことができました。評価基準を変える、子ども一人一人のまだまだ見つけれていないステキな所をつなげていけるクラスにしたいなと思います。

「クラス会議の効果」

たくさんの赤坂先生の事例を聞いて圧倒されてしまいました。心熱くなるエピソードもありあっという間のお話でした。昨年度のクラスでは岡本先生に教えてもらったクラス会議を初めてやってみたのですが、とってもいい雰囲気になりました。ただ今年はクラスの現状を見て、弥刀小の先生の声にもあったようにちゅうちょしています。ですが、今日の校内研修に参加させて頂き、やっぱりやってみようという前向きな気持ちになれました。弥刀小の先生方は学校で一丸となって取り組まれているので今後の様子もまた聞かせてもらえたらなと思います。今日は参加させて頂きありがとうございました。

「誰かを想う心」

身近な友だちの人生について、一緒に考える、他者の思いを読み取ることができる機会を子どもたちに経験させることは、とても良いなと思いました。全体の流れをイメージしつつ、自由な形で良いと聞いて、一年生でも取り組めるように一つずつ試してみようと思いました。

「もっと気楽に楽しむ」

クラス会議は堅苦しく考えず、もっと気楽な気持ちで取り組んでいきたいと改めて思

いました。たくさん出た意見をしぼっていく時、どうしても「多数決ではなく話し合いで」ということにしばられていましたが、みんなで取捨選択する方法もあるということ、そして「選ばれなかった意見にこそ価値を見出す、ムダではなかったと価値づける」大切さを赤坂先生から学ぶことができました。二学期もみんなで楽しみながら「まずやってみる」ことを大切に、継続して取り組んでいきたいと思います。

「クラス会議について」

今回のクラス会議の研修では、いろいろな実践を混じえて、お話を聞かせて頂き、学びの多い有意義な研修になったと思います。どのようにクラス会議を進めていくのか、クラス会議を通して、子どもたちにどうなっていってほしいのかなどを考える時間になりました。クラス会議を行うときにおさえておくこと等も知れました。今回の研修では、時間の都合で聞くことができなかったレジュメの内容についてのお話ももう少し詳しく聞ければよかったなと思いました。

「気を楽に…」

今日は研修ありがとうございました。赤坂先生の言葉を聞かせていただいてクラス会議に対してもっと気を楽にして取り組んでいいんだということがわかりました。実際のクラス会議の様子等を写真等でも見せていただき、自分の「クラス会議」へのぞむ気持ち、モチベーションをあらためて考え直すことができる時間となりました。

「具体的な取り組みを見せてもらい、効果を教えてもらい」

様々な学校の様子を見せてもらい、内容がわかりやすかったです。子どもたち自身も前向きに肯定的に取り組んでいる様子が見られるので二学期もやっていきたいと思います。二学期は思い切って子どもを信じてまかせてみる場面を意図的に増やしていこうと思います。

「自分次第」

昨年度もお話を聞かせて頂きましたが、私自身の課題としては、時間を設けることです。昨年度は「クラス会議」ではなく「お話し会」という時間を作り、みんなで話しをする時間が共感によって安心できる場になるようにやってみました。子どもたちがリラックスして語り合えるという意味では、やってよかったなぁと思っています。二学期からでも、時間を作っていきたいなと改めて思いました。

「クラス会議の効果と仕組み」

クラス会議を先生の枠にはめようと進めるのではなく、子ども達の主体性に任せ、子どもの成長や問題解決能力を高めるというのは学級集団づくりでとても大切なことだと思いました。他の先生が言っていたように議決の結果を求めるのではなく、相互理解の成果が得られることは、そんなに難しく考えずとも達成できそうだと感じることができました。

■番外編

この振り返りを赤坂真二先生に送ったところ、このような返信を頂きました。

先生方の感想をフィードバックしていただきありがとうございました。
正直、圧倒されました。
話の内容が先生方によく伝わったようで安心しました。
（省略）
また、何よりも先生方が学ぼうという高い意欲と姿勢をお持ちだからですね。
先生方の感想の端々からうかがえる、職員室の雰囲気の良さもその理由の一つとして

欠かせないと思います。

クラス会議みたいな実践は，子供の声を聞きながらつくる実践なので，「教え方」や「教材」，「学業成績」に関心を向ける方からは「意味がわからない」と言われることがありました（かつて）。

しかし，全国には，子供に感心を向ける先生方が大勢居て，あのような実践が紹介できるほどに積み重なっているというのが現状です。

M小学校でもあれだけすばらしい実践報告ができるくらいに，子供が躍動する学校になっているということが伝わってきました。子供が動き出せば，トラブルも起こります。しかし，それらはみんな子供の学習の機会だと思います。

クラス会議は，子供の生活そのものを学習材とする希有な教育活動だとも言えます。

それにしてもM小学校の先生方は，子供に感心を向けるすばらしい職員チームだと確信しました。

先生方の一日一日が，愛に溢れる時間になることを願ってやみません。

クラス会議は，
子どもたちに愛を伝える時間，
そして
子ども同士が愛を伝え合う時間
だと思っています。

研修の時間が先生方のお役に立てたのなら幸いです。

応援しています。

■おわりに

先日学級で「クラス会議」を行いました。テーマは、他のクラスの友達に嫌なことを言われるので困っているでした。そこから、出た解決方法は「友達を頼る」「先生の近くで掃除する」でした。そんな解決方法で大丈夫？と思われる方もいるかもしれません。

しかし、大事なことはみんなで困っている子どもに寄り添って、悩みについて考え合う時間の共有だと思いました。

その時間のあと、男女で言い合っている場面がありました。ある子どもはイライラしてかなりきつい言葉を使って怒りを表現していました。その時に私がしたことは、

「先生に何かできることある？」

と聞くことでした。すると、話し合いの場面をとりたいとのことでしたので、一緒に聞きました。互いに嫌だったことなどを伝え合い、それぞれ納得して話し合いは終わったのですが、その後一番怒りを表現していた子どもが私のそばにやってきました。

「言い過ぎてしまった。」「あかんかった」そう伝えてくれたので、一緒に謝りにいきました。

こんなことは日常茶飯事です。しかし、こういう場面を見逃さずいたいものです。なぜ、素直にこのような表現をできるようになったのでしょうか。

クラス会議で共有した時間があったからだと考えています。教師である私は、「あきらめないよ」「見捨てないよ」とあえて伝えるようにしています。そんな当たり前のことと思われるかもしれません。しかし、赤坂真二先生の「子どもたちに愛を伝える時間」というお言葉が根底にあるので、大げさかもしれませんが、自己肯定感が低くなっている子どもにはきっちり伝えています。

愛を伝え合う時間、それが「クラス会議」であり、授業となればいいなと思っています。

考える力をつけるための授業の組み立て方②

思考力の土台となるものとは？

大阪教育サークルはやし　荒井　賢一

「考える力」をつけるためには、土台となる知識（語彙）を増やす必要がある。ただ、その語彙も、生活語彙だけでなく、抽象的な語彙を意図的に学ぶ必要がある。

それは困難に思えるが、大丈夫。

なぜなら、抽象的な語彙を学べる格好の教材があるからだ。

俳句・短歌・詩である。

短歌集『サラダ記念日』を書いた俵万智は、詩の仕事について、次のように語る。

「詩の仕事というのは、大げさかもしれないけれど、まだ言葉になっていないものを言葉で捕まえるっていうかな。みんなが感じているけれど、まだ言葉になってない感情とか思いとか風景とか出来事とかに、言葉で印を付けていくっていうか、それが詩のひとつのかたち、大きな仕事だと思うんですよね。」

詩人は、一つの言葉の中に、いろんな思いや感情を込めている。俳句・短歌・詩は、そんないっぱいな思いや感情を詰め込んだ抽象度の高い言葉によって、構成されているわけである。

それゆえ、国語における詩歌の授業は、考える力をつけるために、重要な授業なのである。

授業プラン・詩「素朴な琴」

【板書】秋

「秋と聞いて、連想すること、思いつくことを言ってみましょう。」

・季節。　・焼き芋。　・スポーツの秋。

・読書。　・収穫。　など

【板書】秋の

「「秋の」に続く言葉をノートに書きましょう。」

・秋の季節。　・秋の味覚。　・秋の空。

・秋の収穫祭。　など

【板書】秋の美しさ

「秋の美しさを文章で表現してみましょう。」

できた子から発表させた後、

「八木重吉という詩人が、秋の美しさを詩にしています。」

（詩を紹介する。）

素朴な琴　　八木　重吉

このあかるさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐へかねて
琴はしづかに鳴りいだすだらう

詩のプリントを配った後、個々で音読させ、読みを確認する。

「耐へ（え）かねて」「しづ（ず）かに」「だら（ろ）う」を押さえる。

「「鳴りいだす」を今の言い方に書きかえてみましょう。」

・鳴りだす　・鳴り始める（↑が正解）

「「耐えかねて」いるのは、だれですか。」

・琴　・素朴な琴

話者や作者も耐えかねていると出れば素晴らしいが、その意見が出たとしても、「なるほどね」と軽く受けておく。

【板書】擬人法

「人ではない琴が、人のように耐えかねています。このような表現を擬人法といいます。」

「琴は今、鳴っていますか。」

鳴っているなら○、鳴っていないなら×をノートに書かせ、その理由も書かせてから、指名なし発表させていく。

詩の中の「おけば」、「だろう」「鳴りいだす」を根拠に、鳴っていないという意見が言えればいいだろう。

「琴は、本当に鳴っていないのですか。」

もう一歩突っ込む。意見がある子には言わせる。

【板書】琴→鳴き始める　人→

「琴が鳴き始めるなら、人がこの明るさの中にいれば、どうなると思いますか。」

・ほほえむ。　・踊り出す。

・歌い出す。　など

「では、詩人ならどうですか。」

・詩に書く。

「詩に書くことを詩を詠むともいいます。詩人の八木重吉さんは、秋の美しさに感動して、この詩を詠んだのかもしれませんね。」

ここからは余談です。

「詩人の郷原宏さんは、この詩について、こう語っています。

「おそらく日本語で書かれた最も美しい四行詩である。」と。」

【板書】八木重吉（1989年～1927年）

「八木さんは、わずか29歳で亡くなっています。」

【板書】『貧しき信徒』（一九二八年二月、野菊社）

「八木さんのこの詩が載っている詩集『貧しき信徒』は、八木さんが亡くなった　四ヶ月後に出版されたのでした。」

八木さんが結核で亡くなったことや、キリスト教の信者であったことは、言っても言わなくてもいいだろう。

宮沢賢治と同じく、この人も没後に評価を高めた人なのである。

「素朴な琴」で発問づくり

教育大阪ＲＥＤＳの例会で、詩「素朴な琴」の発問づくりをしてもらった。私としては予想外の発問とその解釈が出て、面白かった。

「今は、朝、昼、夜のいつですか。」

私は明るいから当然、昼だと考えていたのだが、朝や夜（満月）だと考えている先生がいた。

「「このあかるさのなかへ」と「この明るさの中へ」では、どうちがいますか。」

平仮名の方が、やわらかさが生まれ、自然を表しているように思える。

「「この」は、何を指していますか。」

話者の目の前の、という意味でしょう。

「琴は鳴っていますか。」

（私も考えていた発問である。）

牧園先生が、「素朴な琴」は「秋の虫」を例えているのではないか、と言っていた。そういう解釈も出来るところに、詩の自由さがあるだろう。

思考停止という病理②

日本人が思考停止に陥りやすい原因の一

つが「お任せ」にある。以下、榎本博明『思考停止という病理～もはや「お任せ」の姿勢は通用しない～』(2023.5 平凡社) より。

日本人は、相手に「お任せ」する方式に馴染んでいる。専門家でもある相手を信頼し、「お任せ」にした方が、よくわからない自分が決めるよりも適切な判断ができると思うからである。寿司屋などでも、「お任せ」の注文をする人がいる。

確かに「お任せ」コースを選んでしまうことがある。また、自分で考えることを放棄して、専門家の意見を丸呑み（お任せ）してしまうこともよくある。

だが、こうした「お任せ」を海外でやったら、どんな酷い目に遭わされるかわからない。盛り合わせ1つで何万円も請求されるかもしれない。しかも「お任せ」したのだから、文句は言えない。

誰もが自分の身を守るべく自己中心的に動く文化で暮らしている海外の人たちは、決して「お任せ」の姿勢を取ることはない。そのため自分で考えて判断する姿勢が身についている。

要するに日本人には、自己中心的な人が少なく、自分を身を守るべき危機意識が薄い、ということだ。それゆえ、自己中心的な人は集団から排除されがちになり、身を守るのも自分ではなく社会が安全確保してくれるわけである。

思考停止に陥らせる仕組みで、社会が成り立っているなら、自分で考えない方が楽だと思えてしまうことだろう。

欧米社会では、上位者の命令によって、下位の者は仕方なく従ったり受け入れたりする。それに対して、日本社会では、上位の者が強制力を発揮して押しつけなくても、下位の者が自ら率先して上位者の意向を汲み取って動こうとする。

日本人は「従順」と言われる。でも、世界では、稀な性質なのである。コロナの自主規制でも、日本人は罰則もないのに政府の意向に従っていた。

海外では、政府の方針に納得できない時など、暴動が起きて大変な騒ぎになるが、日本ではそのような暴動がほとんど起こらない。多くの国民は、理不尽さを感じつつも我慢してしまう。

それを寛大さとか忍耐強さといったポジティブな性質に結びつける見方も成り立つだろうが、それは間違いなく思考停止の徴候といえる。自分で考えて判断するのは面倒だし、「お任せ」にする方が楽かもしれないが、自分で考え判断するのを放棄してしまったら、まさに思考停止である。

【学力研Ｚｏｏｍ例会
10月22日（日）午後2時～3時】

毎月一回、Ｚｏｏｍによる例会を開いています。学力研会員なら参加無料です。
ミーティングＩＤ：６９３０７０６４４２
パスワード：６５３３５９
（今回は、丸小野聡暢先生が、六年算数「組み合わせ」の授業について話されます。）
また、近況の交流もしています。
ぜひご参加ください。

社会科（歴史）授業力アップ講座　⑨

素材研究

学力研常任委員　深沢　英雄

一、素材研究とは何か

「教材研究と一般に呼称されているものを私は三つの段階に分けて考えている。素材研究というのは、成心なき一読者として力いっぱい作品そのものと向き合って読む読みを言う。子どもに教えるとか、どこがむずかしいかというような『教師面』をしないで、一人の人間、一人のおとなとしてその作品と純粋に力いっぱい対峙する読み方である。

私はこの作品をこう読む。私はこの作品についてこう考える。私はこの作品をこう批評する。私は・・・、というように、誰はばからぬ自分自身の読みとりの確立を図ることが、この段階の最もたいせつな作業である。

そして、この『素材研究』の確立、その確かさ、深さこそがその後の授業の成否を決めていくことになる。ここのところが弱く、曖昧であったならば、子どものさまざまな発言に対してそれらを望ましく方向づけしていくことはできない。

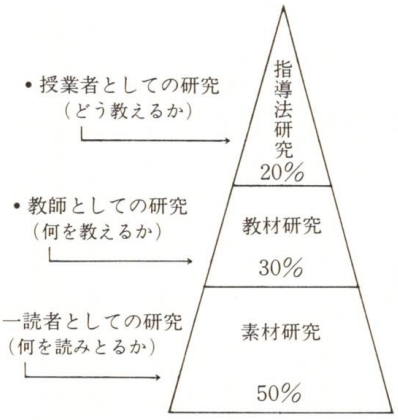
私は、この考えから、素材研究に半分以上の精力を注ぎこむべきだと主張した。そして、深く、確かな素材研究の上に初めていわゆる教材研究が成立するのだと考えたのである。さらに、素材研究に半分以上の労力と時間と精力を傾けてあるならば、教材研究にかけるそれらは、三十％で十分であろうとも述べたのだった。」　名人の道　国語教師　野口芳宏　日本標準　一九八九年

を読んだのが、三十代なかばでした。この素材研究という考え方に私はとても影響を受けました。この考え方は、国語という教科だけでなく、すべての教科に通じる本質的なものだと受け取ったのです。

四十代になってはじめた、社会科の歴史授業研究においてもこの考えがベースにあります。

私は、歴史授業においては、「素材研究」というものを歴史事象について、「一人のおとなとして、力いっぱい対峙する読み方」ではないかと考えました。

〇〇時代について、私はこう思う。私はこの歴史事象についてこう考える。私はこの人物をこう批評する。私は・・・、というように、自分自身の読みとりの確立を図ることが大切だと上記の本から学びました。



二、「問い」をもつ

「私は・・・」という場合、何が必要なのでしょうか。「なぜなのか」と自問し、「問いかける力」をもつことで、その「問い」に対し思考し、自分なりの答えを模索できます。

「問い」とは、問うことによって事物のありようを「指し示す」ことと言われます。問うことは「わからないことを聞くことではない」のです。基本的にわからないことは問えません。何も知らないことは聞けないのですから。「わからなかったら質問しなさい。」と言うと「何がわからないことなのかもわかりません。」と子ども達から言われたことがあるかもしれませんね。

問いを持つための条件は、問いを持つための基盤となる知識、経験が必要だと考えます。

その上で、「問い」をもって、素材研究・教材研究・指導法研究に向かっていかなくてはなりません。

三、素材研究・教材研究・指導法研究を有機的に関連し合いながら高次へと

平田治氏は、「野口芳宏氏は、教材研究の三段階ということをおしゃっています。まずは素材研究、次に教材研究、そして指導法研究というように。しかし、私はこれを教材研究の順番、順次的な手順だと捉えることには違和感があります。この説明は、野口氏が授業構想に至る教師の仕事を、構想し終わった段階から事後的に説明し直しているのだと捉えたい」と言われます。

「段階的な手順と捉えてしまうと、勘違いすることになる。まず手始めにインターネットなどで作者の生い立ちや作品の成立過程などを調べて、次に文章を教師の視点から読みとり、そして今度はそこに子どもの視点も加えながらどう助言したり発問したりするかを考えていくということになる。・・つまりあくまでも入口は教材研究であり、それが必要に応じて素材の研究にまで及んだり、子どもの視点を導入して授業構想の大まかな角度づけを行ったりするような広い内容のものであり、・・

いずれにしても、教師自身の読むが一般的常識的なものから高次なものに転換していかなければ・・」（ライブ　学ぼう教材解釈　）一莖書房

社会（歴史）の場合は、教科書からスタートです。教科書を隅から隅まで読みます。細部も見逃しません。文章・写真・絵図・グラフ・イラスト・キャラクターの子どもの発言。何回も読みます。

最初は、ざくっとした「問い」しか持てないかもしれません。教科書の文を読み込んでいくと「問い」が生まれてくることもあります。「問い」を意識的に持とうとすることも必要です。「問い」を持って、素材研究に入っていきましょう。

学力研　第17期 先生のための学校・オンライン・一回目　報告

荒井 賢一（大阪教育サークルはやし代表）

毎年、九月頃から全六回に渡る連続講座として、先生のための学校を行っています。今年度で、第17期となります。（今年度も、オンラインによる無料開催です。）

【講座A】

十川瑠都「音読～できるわかるつなぐ～」

音読は、脳を活性化する。（川島教授の脳の画像を提示。）

音読を宿題に頼ると、家庭による格差が広がる。授業の中で保証すべき。

音読する事の楽しさを体験させていく。

①さまざまな読み方で、音読を楽しむ。

（音読を遊びにする。）

例：連れ読み・交代読み・ペア読み・たけのこ読み

②評価を具体的にする。

（強弱・高低・速さ・間・声色など）

授業の中で聴く。給食中や休み時間に一人ずつ聴く。

③音読を聴き合い、自分の声を意識する。

ペア読みで、よいところを伝え合う。

友だちの声が自分をかしこくし、自分の声が友だちをかしこくする。

④どんな教科でも、音読する。

《受講者の感想》

・音読という何気なく行なっていることに対して「どんな力をつけたいのか」という意識を教師自身が持つことが大切だと感じました。先生のクラスは全体として集中していたり楽しそうに取り組んでいたりと優しい雰囲気がありました。読ませ方のバリエーションや評価の仕方など、国語以外の教科でも実践できるなぁと思いました。ありがとうございました。

・音読は大切にしてきたつもりですが、楽しく…という意識が足りていなかったかな、と気付きました。時間はかかるんですよね、でもそれだけの価値があると思いました。十川先生ありがとうございました。

【講座B】

岸本ひとみ「できるわかるつなぐ算数

～2学期だからひと工夫～」

あまりのあるわり算（3年）のように、習熟が必要な単元は、学期の始めの落ち着いた時期に、移動する。

授業の組み立て例

「3年あまりのあるわり算」

① フラッシュカード（5分）

誤答が多い九九を中心に。

② にこにこわり算（等分除）とドキドキわり算（包含除）の見分け方（20分）

③ 式からわり算のあまりありの習熟（15分）

④ 練習問題（5分）

わかるとできるを行き来させてから、つなぐ。

教科書の内容と子どもの実態がズレていないかを確認。習熟が後回し、家庭任せになっていないか。全員が「つなぐ」に参加できる条件を設定しているか。

《受講者の感想》

・岸本先生の取り組み大変参考になりまし

た。低学年でくり上がり、くり下がりや計算の工夫で躓く子どもが多く、何度も習熟組＋おさらい組に分けて1時間復習したりします。細かく少しずつ触れる取り組みは良いと思いました。

・ひとみ先生の、習熟を家庭任せにしてしまっていないか…という言葉にドキリとしました。今年、学年そろえて宿題を廃止して自主学習としています。理念は立派でも実態はどうか。習熟にどう取り組むか取り組ませるか、考え直してみたいと思いました。

【講座C】

岡本美穂「追求する国語の授業

～「注文の多い料理店」～」

国語専科として苦労したことは、国語を通してどう子どもたちとの関係づくりをするか、国語が嫌いな子をどうするか。

課題のある子ほど、国語なんか役に立たない、面倒と思っている。

めあて、発問、わかるにこだわる。

国語で、さかのぼり学習。（わかるにこだわる。）

学習用語や読み取り方を「国語の宝箱」「話し合いの宝箱」として残していく。発問にこだわる。大きい発問から。みんなができる経験を積んでいく。そして、深い発問へ。

《受講者の感想》

大きな発問から授業を始め、全員が参加できることを保障する…心がけてはいますが、いつもできているとは言えません。どの子もできるが基本理念、意識したいと思いました。掲示物の写真も参考になります、定着させたい知識はよく目に入るところに掲示しておくのがいいですね。掲示物はサボりがちなので、頑張ってやってみます。そして何より、子どもたちがお隣さんとごく自然に対話を始める姿に驚きました。子どもが必要感を覚えた時に自然と対話が始まる、始めて良いのだという雰囲気を作っていきたいと思います（今は私がペアで話してごらんと指示した時に、対話しています。逆に云うと指示されないと対話しない子どもたちにしてしまっています。）

【講評と講話】久保　齋校長

あいかわらずの久保節炸裂でした。

《受講者の感想》

・久保先生のペア学習の目的についてよく分かりました。隣の子の成長を喜ぶことができる子どもを育てたいです。それには、わたしがどの子も成長を喜べる教師を目指します。本日は、ありがとうございました。

・今日はありがとうございました。愛されたいという子がとても多い学級で悩んでいたので、「子どもが人を愛すること」という言葉に驚きました。「頼りになるのはお隣さん」みんなでかしこくなろうと繰り返し伝えて、お互いを高め合ってクラスを盛り上げていきたいと思います。

・久保先生の熱い語り、心に響きました。私は1学期に抜き打ち漢字テストを実施していましたが、悪い点数が続くわ、やる気もなくなっていくわで悪いことばかりでした。今学期からテスト日を伝え、テストを実施していますが子どもの表情がずいぶんよくなり、伸びている自分が好きになったと話す子も増えてきました。それと、先ほどのお話が重なり、ペアで愛を育てる取り組みを実践していきたいと思います。

局長だより　10月

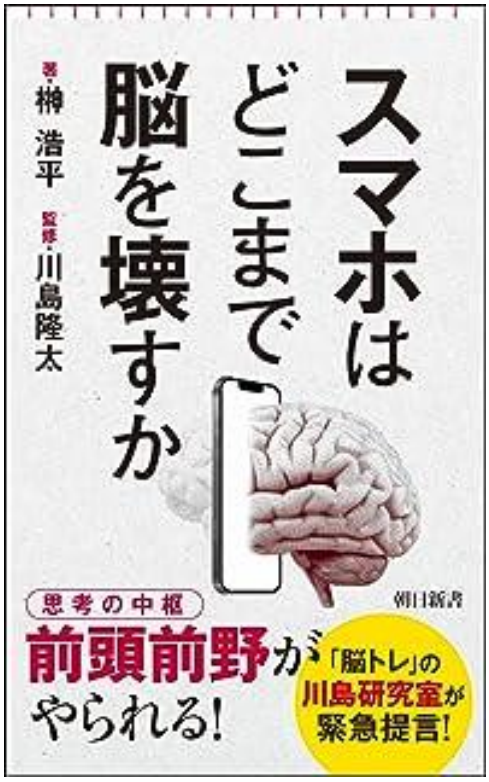
◇学力研最新情報　岸本　ひとみ

●来夏の全国フォーラム
記念講演者は　榊浩平氏です！

今年の全国フォーラムが終わったばかりですが、来夏の記念講演をして下さる方が決まりました。東北大学加齢医学研究所の　榊浩平さんです。「スマホはどこまで脳を壊すか」の著者として知られています。

＝スマホ依存を放置した先に待つのは、認知症予備軍であふれる社会か！！スマホを常用し、脳をラクにさせていると、成長期の子どもなら脳発達が大きく損なわれ、成人なら不安・抑うつ傾向が高くなることが明らかに。＝

と述べられています。学校でタブレットを扱う時間が増えていますが、果たしてそれでいいのかと疑問に思っておられる方が多いのでは。この機会にぜひ、榊先生の講演を聞いていただきたいと考えています。



◇事務局だより　岡本　美穂

●第17期先生のための学校

9月9日（土）　振り返りより

■発表してくださった瑠都さん、岸本先生、岡本先生、檄をとばしてくださった久保先生ありがとうございました。先生方の話をうかがって、改めて自分の足りないところや、分かっているつもりで出来ていないところが浮き彫りになって有意義でした。

瑠都さんの音読を宿題任せにしない、というのがいいです。やはりしっかりと教室で力をつけるというのがどの学級でも常識になればと思います。

岸本先生の講座では、学級担任でなくやりにくい面があるにも関わらず、出来ない子どもに寄り添っているところが良かったです。

岡本先生は、物語文でもさかのぼり指導をしているところがとても参考になりました。

荒井先生、進行ありがとうございました。

■三人の先生方ありがとうございました。とっても参考になりました。明日からやっていきたいです。久保先生のお話、毎回、改めて考え直し、心に留めておきたい事がたくさんあります。ありがとうございます。来週テストがあるので、おとなりさんと力を合わせていい点取ろうと作戦をやります！音楽の歌と鍵盤ハーモニーカのテスト前もお隣さんで協力をしてみます。学力と愛と学級を育てていきたいです。

●次回は10月14日（土）

HTTPS://WWW.KOKUCHPRO.COM/EVENT/BEE60D7E4D55828DD4D25AE252F4D0E6/

●11月11日　（土）
https://www.kokuchpro.com/event/e80c9908efa46d0cb34bf320c710ec2d/

●12月16日　（土）
https://www.kokuchpro.com/event/0abb330e41278e447c6fa35831442134/

●1月20日　（土）
https://www.kokuchpro.com/event/ab3a6ab09e92acd8a0af04775da00c60/

●2月10日（土）
https://www.kokuchpro.com/event/8adf016597b91ec5c4514c8a54e236c3/

学力研カレンダー

≪各地のサークル・部会　２０２３年　１０月　例会、イベント≫

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしています。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

10/

２１（土）大阪教育サークルはやし　午後　エルおおさか　荒井 aik28501@bca. bai. ne. jp
２１（土）みなみ学力研　9 時半～12 時　阿倍野区民センター　図書 nobu580701@yahoo. co. jp
２７（金）いろえんぴつ（加印）　18 時半～　稲美町ふれあい交流館　岸本 090-9117-6330
２７（金）春日井学力研　18 時半～　レディヤン春日井(JR 勝川駅)　山口 080-6904-1697
２７（金）伊丹学力研　18 時半～　伊丹市役所前サイゼリア　前田 090-9715-3830

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はご連絡下さい。

○　神奈川学力研　10 時～12 時　県民サポートセンター７０４号室（横浜駅西口）　湯浅 090-1104-4667
○　持ち方書き方研究会　ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を　前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等　今後の予定 》

○　学力研・先生のための学校【全６回】

9月　9日（土）　13時半～15時半【済】　10月14日（土）　13時半～15時半
11月11日（土）　13時半～15時半　12月16日（土）　13時半～15時半
2024年　1月20日（土）　13時半～15時半　2月10日（土）　13時半～15時

○　１年生講座

10月28日（土）

（詳細はメルマガ、「こくちーず」などで）
（講師派遣希望、サークル情報などは　事務局へ　079-426-5133）

ご意見・ご感想は下記まで
荒井　賢一　E-mail　aik28501@bca.bai.ne.jp
李　詩愛　E-mail　iwamotoshie@gmail.com
堀井　克也　E-mail　katsuya4k1h9@gmail.com